

# イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授  
小田島 恒志

(第21回)

## 受付

ロンドンに留学していた28年前、Cという弁護士事務所で「ビジネス日本語」を教えるというアルバイトの職を得た。シティにいくつかビルを構える大手事務所（というより、会社）で、「教室」もそうしたビルの一室（恐らく、会議室）だった。それまで、学生という身分に相応しい「質素な」生活をしていたので、週に一度出かけていく「ホワイトカラー」の世界が何だかまぶしかった。

教室に集う社員たち（つまり、弁護士たち）も、いかにもエリート／インテリな老若男女で、それもまぶしかった。それでも、初めて触れる日本語の文法や構文には面食らったようだ。「私、7か国語を使えるので語学には自信があったんですけど…」という女性も、あまりにも他言語と勝手が違うので苦労していた。

と言っても、ビジネスのために使える日本語会話を学ぶのが趣旨なので、基本的に簡単な挨拶と有用な単語やフレーズを丸暗記していだけである。しばらくして、彼らの学習法が分かってきた。教室や教科書から覚えた表現を悉く使ってみようとするのだ。「今朝、早く起きました、と、歯を磨きました、と、朝食を食べました」といった具合に。ん？ なんかヘンだな。そうか、前回「と」という断片語（助詞／繋ぎ言葉）は「and」だと

教えたからか。さすがの応用力。だけど、文と文を繋ぐときには使わないんですよ、と説明を加えていく。本当は文と文を繋ぐこともあるし、そもそも演劇用語の「ト書き」の「ト」はそういう使い方から来ている、などとややこしい話はしない。

教科書に出てきた場面設定の「受付」というのは「reception」のことです、と説明した時の事。例の語学堪能な女性が質問してきた。「会社のreceptionが受付なら、個人の自宅のreceptionも受付ですか？」いやいや、自宅に玄関（entrance hall）はあっても受付（reception）はありませんよ、と言うと、「でも、カズオ・イシグロの小説に出てきたのですが…」と言う。なるほど、イシグロの初期の作品には日本の旧家の描写が出てくるので、確かにreceptionがあるかもしれない。取次の間（次の間とはちょっと違う）とでも言うのだろうか。でも、あまり現代のビジネス日本語として有用な単語とは思えない。仮に、個人の自宅にreceptionがあるとしたら、それを何と呼ぶかはともかく、そのお宅が大邸宅だということだけ分かれば結構、と説明したが、何だかやっかみみたいになってしまった。でも、そこはイギリスでも同じですよ？